〈居場所〉概念と実践の可能性

――事例研究を通して――

東京大学　田中麻衣子

1　目的

本研究では実践の中でどのように「居場所」概念が運用されているのか主に実践者の「規則の語り」と初参入者が抱く「当惑」の経験（≒場の秩序）に焦点を当て、「居場所」づくりという実践の編成を記述していくことを目的とする。

2　方法

実践の分析にあたり、2014 年下旬～8 月下旬、2015 年 6 月～8 月の間に「居場所づくり」を行う NPO 法人に週 1 回のボランティアとして参加しフィールドワークを行った。またフィールド先の代表 1 名、スタッフ 5 名にそれぞれ 1 時間半程度の半構造化インタビューを行いデータを収集し、事例を記述した。

3　結果

分析の結果、先行研究で定義されてきた 10 以上もの〈居場所〉の定義は実践者の「「居場所」を語る」という行為を記述してきたと示唆できた。実践者たちは先行研究で記述されてきたような〈居場所〉観を参照しつつも、参加者の組織への包摂度合を把握し、その度合により段階的に個人を組織に位置づけるという方法を用いて「みんなの居場所」となるように組織を維持していた。特に極端に特出した能力をもつ者に対してはその卓越性を他の参加者とのバランスをみて「隠し」、誰にでも「承認」が分配されるあり方を目指し「みんなの居場所」を達成していた。

また、このような「必要とするすべての者の〈居場所〉となる」ように組織化された空間の中で、活動に参加する多くの人々は「目の前の人物が何者であるのかわからない」という「当惑」（Goffman 1956＝2002:112）に直面していた。この「当惑」の経験は〈誰でもこれ/誰でも居られる〉ために「何者かわからないけど受け入れる」、「誰が誰なのか明らかにしない」（ボランティア/利用者の区分を明確にしない）という実践の結果生じていた。

この実践は「利用者」が自身の属性を「名乗る」（不登校であるなど）という行為にスタッフ自身が「悲痛さ」を感じ、「何か張り付けられたものがおちる」ような実践を目指す中で組み上げられたものであった。「利用者」はこの「当惑」を契機に自己を位置づけるような枠組み（利用者/発達障害/といったカテゴリー）をずらし、新たに自身で自分の位置を定位しなおす＝自身が担う（担わなければいけない）「役割」を組み替えることが可能となっていた。

しかし同時に当事者の声に忠実に応えるために行われるこれらの実践により当事者の抱える課題(ニーズ) がみえづらくなり、医療的ケアといった〈専門性〉を後退させ、参加者間の<関係性による包摂・承認>が前景化するという状況も生んでいた。誰も拒まない〈居場所〉として当事者に応えることが逆説的に外部機関との繋がりをたち、また内部でのニーズの把握を難しくするという結果を招いていた。

4　結論

以上から〈みんなの居場所〉として組織された〈居場所〉において、参加者は一方的に付与された〈カテゴリー〉によらない〈他者との〉〈関係性〉の中で自己を再定位しなおすことが可能となっていた。しかしそのような〈関係性〉の前景化によって実質的に必要とされる支援（資源）もまた同時に奪いかねないという課題を示唆できた。先行研究においても〈居場所〉と〈他者との〉〈関係性〉は強固に結びついた概念であるが、そのような〈関係性〉に期待しながらも外部機関から得られる資源も柔軟に求めていく戦略的論理との接合の必要性も示唆できた。

文献

Gofman, 1967, interraction Ritual:Essays on Face to Face Behabior, New Yourk: Double-day Anchor.(=2002, 広瀬英彦・安江孝司訳『儀礼としての相互行為――対面行動の社会学』法政大学出版局

The possibility of ″ibasyo″concept and Practice